

核廃絶を訴える

與賀田 英 男

隣で妹たちが「落下傘だ、落下傘だ」と騒いでいました。私も見上げたものの、何も見えません。間もなく、ピカッと閃光（せんこう）が走り、何事かと思う暇もなく、物すごい音響とともに、その場へ押し倒されるように伏せました。

挟まれていました。隣の人と協力して妹たちを助け出し、防空壕に送り込みました。

それから近所を見回ると、おばさんたちが押入れに頭を突っ込んで腰を抜かしていたり、昼食の準備で七輪に鍋（なべ）をかけたまま逃げ出していました。

それから近所を見回ると、おばさんたちが押入れに頭を突っ込んで腰を抜かしていたり、昼食の準備で七輪に鍋（なべ）をかけたまま逃げ出していました。

頭を上げると、まわりに瓦が散乱しており、びっくりして家に駆け込むと、母が一番下の妹と甥（おい）を両脇に抱えて、ぼうぜんと立ちすくんでいました。すぐに防空壕へ連れて行くと、隣で妹たちが何か叫んでいるのが聞こえました。

先年、父が亡くなり、その時の人たちがお悔みにきてくれ、当時をしのび、思い出話に生きている喜びを分かち合いました。

急いで引き返すと、妹たちは壁に

夜になり、お隣のおじさんが、背

中一面に火傷を負い、ところどころにシャツの破片がこびりついた悲惨な姿で、やっと帰り着きました。そのまま、寝込んでしまいました。

おばさんの必死の看病のかいもなく、一度も元気にならず、数年後に亡くなられたそうです。

父が帰宅し家族がそろってから、自宅の周囲を板片で打ちつけ、とりあえず父の田舎へ帰ることにしました。父を先頭に家族八人がはぐれないうよう一本の帯を握りしめ、稲佐橋を渡り、不安と怖さで押し黙ったまま歩きました。

途中、行き交う人々は、走るように急いでいる人、けがや火傷で洋服がボロボロになったまま、今にも倒れそうに歩いていましたが、私は声をかけることも出来ませんでした。

浦上の方向を見ると、あちこちで